【土木史研究　講演集　Vol.28　2008年】

岡山市の市役所筋のセットバックに関する歴史的研究 *

Historical research on Setback of the City Hall Street in Okayama

木村友季**・樋口輝久***・馬場俊介****

By Yuuki KIMURA, Teruhisa HIGUCHI and Shunsuke BABA

要旨

岡山市駅前の市役所筋（南方柳町線）は、昭和46年という早い段階から、いわゆるセットバックを実施してきた。市役所筋では、延長1.3kmにわたり、両側の歩道の建物を5m下げる指導が、法律上の拘束がないまま、一種の紳士協定という形で行われ、現在に至っている。この昭和46年という時期は、横浜の山下公園通りで延長0.9kmにわたり、陸側歩道の3mセットバックがスタートした時期と同じであり、わが国でも最も古い事例の一つといえる。現在では、法令も整備され、各地でセットバックが行われているが、創始期のセットバックがいかに困難なものであったかを、開始時点での総責任者を始めとして、歴代の担当者のヒアリングをもとに再構成することで、わが国の都市計画の歴史の一端を後世に伝えるのが本論文の趣旨である。また、互いに非接触状態で始まった岡山と横浜のセットバックの方法を比較することで、岡山方式の独自性を明確化する。

1．序論

現在は、歩道に面した建物のファサードのセットバックは、ごく当たり前の方法論として、各地で実施されている。しかし、岡山市が昭和46年の段階で、延長1.3km、両側5mのセットバックを開始したことは、きわめて先進的な試みであった。横浜市でも同年に延長0.9km、片側3mのセットバックが開始されたが、景観に積極的な姿勢をとり続けてきた大都市と、一地方都市とでは、その環境も背景も大きく異なるはずである。本論文では、なぜ岡山で、全国でも最初期のセットバックが、市役所筋で実施されるに至ったか、また、実施していく中で、どのような工夫や苦労があったかを、当時の担当者全員からヒアリングすることで明らかにしようとするものである。

本論文とは直接関係ないが、岡山県では、昭和43年に倉敷市伝統美観保存条例が制定され、地方自治体独自の条例によって歴史的景観の保全を行う道を開いた。これについては、全国でも各自治体が関心を寄せ、独自の行政施策として評価されてきた。また、近代の倉敷市繁栄の元となった倉敷紡績工場の全体を、昭和49年に倉敷アイビースクエアという形で一般開放したが、この際に使われた近代産業遺産の大胆な活用法も、建築の分野に大きな影響を与えた。一方、岡山市では、昭和30年代初期に、市内にロータリー方式の交差点が計画された[1)]。それらは、完成時には信号方式に変更されてしまったが、今でも、都心部を中心に中央島半径35～32mの柳川、大雲寺、大供をはじめ10ヶ所もの円形空間が市内に残っている。また、岡山市の象徴である後楽園では、山側の建物の高さ完璧にコントロールされているし、都市側の景観も、視点場を決めてコントロールするなど、都市景観に対する思い入れが強かった土地柄である。

こうした環境下にあって、市役所筋の両側の建物のセットバックは、当時の岡崎平夫市長の発案のもと、市の建築指導課が中心となり、昭和46年からスタートした。この昭和46年という年は、昭和35・36年頃から始まった都市景観の向上への動きが、昭和38年に「緑と花、光と水のまちづくり」の提唱に結びつき、結果として昭和42年に発足した都市美造成委員会が昭和43年に答申・提言した内容を基に[2)]、昭和45年に市長から岡山県県建築士会に具体案の作成を依頼、「岡山市の都市美造成景のための景観構想計画」[3)]として結実した年でもあった。従って、市役所筋のセットバックは、岡山県県建築士会のバックアップのもとで実行に移されることになった。

以下、第2章では、市役所筋のセットバックの方法と達成度、第3章では、本論文の中核であるヒアリングと、そのまとめ、第4章では、横浜市のセットバックとの違いについて記している。

*　Keywords: 岡山市、セットバック
**　非会員 岡山大学大学院環境学研究科博士前期課程
（〒700-8530 岡山市津島中3-1-1）
***　正会員 博士(学術) 岡山大学大学院助教(同上)
****　正会員 工学博士 岡山大学大学院教授(同上)

2．市役所筋のセットバックの方法と達成度

(1) 市役所筋の誕生

市役所筋は、戦災復興事業と区画整理事業を組み合わせる形で、昭和 23 年頃から整備が始まった[4]。しかし、昭和 40 頃までは中央分離帯を挟んで東側の道路しかなく、西側の部分が未舗装で道路としては使用されていなかった。1 本の道路として供用が開始されたのは、昭和 45 年頃である。従って、昭和 46 年にセットバックが開始された時点で建っていた大型建築物はなく、その辺りが、既往の市街地だった横浜市の海岸通りとの大きな違いである。

(2) 市長の思い

戦災で焼土となった岡山市の市街地には緑が非常に少なく、昭和 38 年の段階で、街路樹がわずか 6000 本という状況であった。当時市長であった岡崎平夫[5]は、水道局長をしていた頃に海外視察をした経験があり、わが国と同じように戦禍で荒廃したヨーロッパの各都市の復興ぶりをみて、大きな衝撃を受けた。それは、街の復興が、単にビルを建て、道路の舗装をするという画一的なやり方ではなく、ビル一つにしても建築美、いわゆる景観を常に念頭におき、さらに緑の復興も義務付けている点に大きな感銘を受けた[6]。また、魅力のある美しい街をつくるためには、①しっかりとした計画を持ち、②「時間との根比べ」というぐらいの気持ちで、腰を据えて取り組むことの重要性を理解し、実行に移した。岡山市の都市整備が現在でも「ゆっくりと」「着実に」なのは、財政不足によるだけでなく、この思想が生きているせいなのかもしれない。

(3) セットバックの方法

市役所筋のセットバックの最大の特徴は、建物のファサード全体を 5m下げるというものではなく、最低 1 階を 5m下げるという方式を採用した点にある。しかも、この 5mの部分は、本来の歩道と同一化するのではなく、公共的な用途であれば、ビルの所有者が自由にデザインしていいことになっている。

このような方式は、本来のセットバックの定義から少し外れるかもしれないが、歩行者にとっては、歩道以外に 5mの空間が確保されていることには変わりなく、しかも、ビルごとに空間の使い方が異なっている点に、目先の変化が楽しめるなど、それなりに優れた解決策である。というのも、この方法だと、2 階以上はセットバックしなくて済んで建築主の負担が減り、前例のない中で事業を実施していく上で、理解や賛同を得られやすかったからである。

(4) セットバックの現状

昭和 46 年に始まり、現在 37 年目を迎えている市役所筋の現状を示したのが、**図-1** である。なお、南端部の 300mは、対象構造物が少ないため削除してある。

図中、中央を上下に貫通しているのが、市役所筋であ

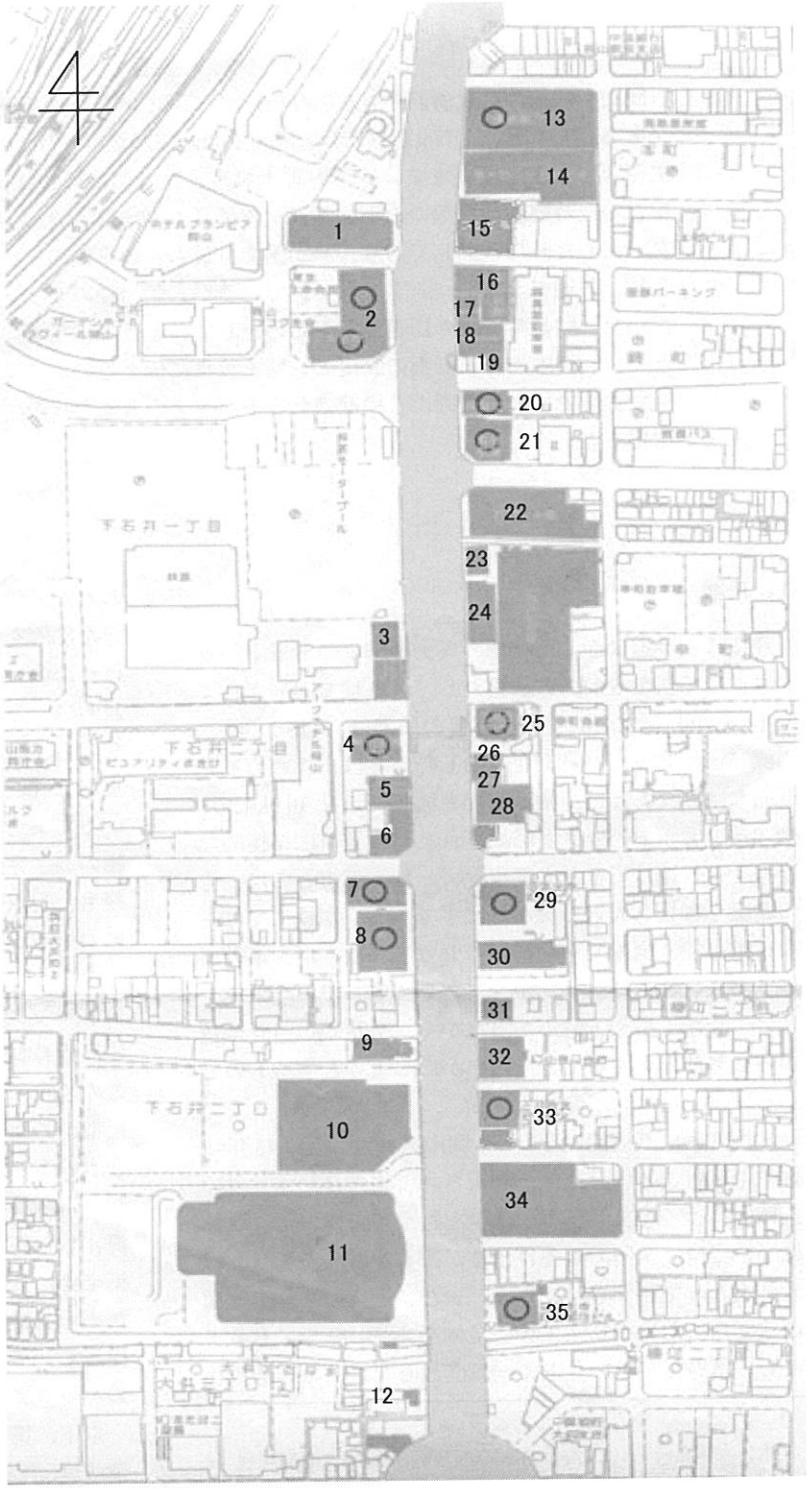

図-1 市役所筋のセットバック現況
(岡山市都市整備局建築指導課 提供資料[7] を著者加筆修正)

る。また、市の誘導指針によるセットバック建物には、灰色を塗ってある。さらに、「岡山市まちづくり賞」の受賞建物には○印を付けてある。○印の多いのは、所有者の自主的な協力に対する、市の謝意の表われと見ることもできる。

次に、具体的なビルごとの詳細について示したものが**表-1**である。

この表によれば、ほぼ 5mを達成しているが、中には、5mを超えているものもあり、①ファサードの統一より、歩行者空間の多様性を追求した結果であること、②所有者の個性を重視したものであることがよく分かる。また、一部に 5mを下回っているものもあるが、強制力がない以上、やむをえないことであろう。

最後に、代表的なセットバック例の写真を、次ページに紹介している。ビル名の後の〔 〕内の番号は、**表-1** の番号と対応している。

表-1 市役所筋のセットバックの状況

番号	建物名称	建築場所	セットバック	面積(㎡)	確認年月日
1	岡山駅前ビル	駅元町	5.5m	119	H18.1.17
2	東京生命岡山ビル	下石井 1-145-12	5m	95.4	S54.11.22
2'	日本生命岡山第2ビル	下石井 1-145-8 他	8m	338.9	S54.11.20
3	林原㈱本社食堂棟	下石井 1-2-3	4.4m ■	792	S57.12.16
3	林原ガソリンスタンド	下石井 1-2-101	1m ■	136.5	S59.4.24
4	第一生命岡山第2ビル	下石井 2-1-101 他 5 筆	5m	240.9	S57.11.12
5	喫茶・お好み焼き「こばやし」	下石井 2-1-104	6m	89.6	S62.2.13
6	金光ビル(KEビル)	下石井 2-1-109,110	5m	83.7	H3.8.21
7	代々木ゼミナール岡山校	下石井 2-2-101,123-125	5m	45.6	H 元.5.2
8	ニッセイ岡山スクエア	下石井 1-1-3	5m	235	H3.12.1
9	うどんやさん	下石井 2-9-101,102,103	5m	74	H10.9.30
10 11	イトーヨーカドー＆ジョイポリス	下石井 2-10-102 他	5m	415	H9.5.28
12	児玉邸	大供 3	5m	55.1	H9.1.31
13	高島屋	本町 201-2	5m	212	S46.12.27
14	第一セントラルビル	本町 205 他 4 筆	5m	178.5	S53.11.21
15	フジビル		5m	110	S38.9.20
16	岡山駅前ビル	錦町 118-3 他	3m ■	53.7	S48.9.20
17	エムエムビル	錦町1-127,128	1.3m ■	17	H2.1.20
18	ミスタードーナツ岡山駅前店	錦町 1-30	1.5m ■	6.7	S55.10.7
19	海星㈱社屋	錦町 1-123,124,121	5m	44.1	S56.10.6
20	両備錦町ビル	錦町 7-23	5.4m	96.3	S62.9.21
21	野村不動産岡山ビル	錦町 6-113	5m	153.6	S55.7.18
22	ビブレ岡山ビル	幸町 1-101 他 5 筆	5m	175.9	S54.3.31
23	キャッスルホテル	幸町 7-1	5m	80.8	S56.5.18
23'	フロムビル	幸町 8-125	1.1m ■	16.6	S61.10.29
24	ニッセイ岡山幸町ビル	幸町 7-121 他 15 筆	5m	206	H14.1.9
25	三井生命岡山ビル	幸町 8－101 他 9 筆	4.5m ■	148.5	S52.12.27
26	岡山鳳城ビル(エクセルビル)	幸町 8-123,124	1m ■	13	S58.9.12
28	住友海上火災ビル	幸町 8-121	5m	88.7	S54.1.23
29	住友生命岡山ビル	柳町 1-292	4.5～5m	170.8	S.50.3.14
30	太陽生命ビル	柳町 1-1-110	5.5m	135.8	S61.4.17
31	おかやま信用金庫	柳町 1-114,115	5m	88	H13.1.26
33	三井住友海上ビル	柳町 1-12-127	5m	162	S63.2.26
34	山陽新聞社　新社屋	柳町 2-6-109 他	1～10m	250	H18.6.6
35	朝日生命ビル	柳町 2-6-117	8m	220.5	S61.6.10
36	岡山市農協会館	大供表町 1-101.102.103	5m	110	H2.10.25
37	淳風会ビル	大供 2-3-101 他	5m	200	S59.2.3
38	大供内田ビル	大供 2-1-101,102	1～5m	71.1	S61.4.24
39	日本火災海上保険岡山ビル	大供 2-2-102	5m	86.5	H 元.4.3
40	平松邸	大供 3	5m	50.4	H17.9.21
41	鹿田本町マンション	鹿田本町 202-35	9m	50	H15.6.6

※ 5mを超えるセットバックには網掛けを、5mに満たないものには ■ を付けている。

3．ヒアリングと、そのまとめ

(1) ヒアリングの方法

研究の方法論としては、昭和 46 年に発足した事業であり、関係者のほとんどが存命中であるため、当事者に直接ヒアリングすることにした。

その際の対象者としては、本来、行政側として、①発案者である市長、②代々の建築指導課長とその補佐、セットバックを強いられる側として、③個々の建物の所有者、④セットバック部分の設計者の 4 区分のすべてを対象とすることが望ましい。しかし、①の岡崎平夫市長は死亡しており、③④については、市役所筋が岡山のメインストリートであることから、全国的規模の会社が絡んでおり、過去の当時者を特定することが、建築指導課の全面的な協力を得ても不可能であった。そのため、本論文では、①の市長の「思い」については、市長の自伝である『愚直人生らくがき帖』[5]と、初代の建築指導課長で全体の枠組み作りを主導した谷 義仁氏（後の、岡山県県建築士会・会長）から間接的に収集・聴取することにし、それ以外の③④との関係は、歴代の建築指導課長とその補佐役からの聞き取りからクローズアップさせることにした。行政サイドからの一方的な意見の集約に終始すれば、セットバックさせられる側の不満が薄められる恐れはあるが、少なくとも、行政側がどう工夫し・努力したかの記録にはなると思い、ヒアリングを実施した。

ヒアリングの対象者と、それぞれの担当時期、ヒアリング時期については、**表-2** を参照されたい。

写真-1 岡山東京生命〔2〕(撮影：著者、2007.12)

写真-2 ニッセイ岡山スクエア〔8〕(撮影：著者、2007.12)

写真-3 高島屋〔13〕(撮影：著者、2007.12)

写真-4 両備錦町ビル〔20〕(撮影：著者、2007.12)

写真-5 キャッスルホテル〔23〕(撮影：著者、2007.12)

写真-6 住友生命岡山ビル〔29〕(撮影：著者、2007.12)

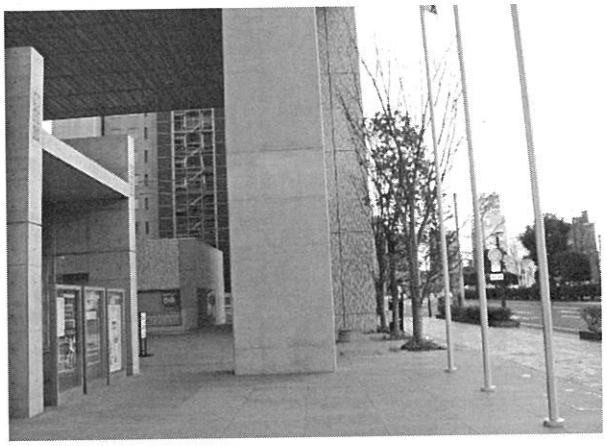

写真-7 山陽新聞社本社ビル〔34〕(撮影：著者、2007.12)

写真-8 朝日生命柳町ビル〔35〕(撮影：著者、2007.12)

表-2 歴代担当者とヒアリング時期

氏　　名	担当年度	ヒアリング日
谷 義仁 (たによしと)	昭和 46～54 年	H19 年 6 月 20 日
岡村 勝信 (おかむらかつのぶ)	昭和 46～54 年	アンケート
上田 恭嗣 (うえだやすつぐ)	昭和 52 年 ～平成元年	H19 年 12 月 5 日
川端 護宰 (かわばたもりはる)	昭和 57 年 ～平成元年	H19 年 11 月 14 日
高上 禮行 (たかうえのりゆき)	昭和 55～63 年 平成 12～15 年	H19 年 11 月 14 日

(2) 質問項目

基本的な質問として、次の 13 項目についてヒアリングを実施した。また、ヒアリングはフリートークのような形で話していただき、その際、基本事項以外のことも話していただくよう努めた。

Q1　当時の岡山の都市景観について、どう思っておられたか。

Q2　市役所筋の位置づけと、その将来像はどのようなものであったか。

Q3　地主（地権者等）の方に協力を得る上で、大変だったこと・苦労した点はどういったことであったか。

Q4　理解・納得をしてもらえず、協力を得られない場合に、どういった交渉をしたのか。

Q5　地主（地権者等）からの要望はどうだったのか。

Q6　要望に対して応えたこと、答えられないことはなんだったのか。

Q7　次の担当者へ、交渉のテクニックの伝授などはあるのか。

Q8　建物を建てるときや建物に関して、都市美創造に関するアドバイスをしたのかどうか。

Q9　建物の出来上がったときの仕上がりはどうだったのか。

Q10　担当に当たっている間、特にどういうことに力が入ったのか。

Q11　岡山の街が良くなったこと、悪くなったと思うことはなにか。

Q12　また、その理由や原因についてどのようなことが挙げられるのか。

Q13　担当している間で、一番大変だったことは何であったか。

(3) 市役所筋のセットバックに至る経緯

岡山で市役所筋が検討・計画される対象となったことについて、岡山市都市美造成委員会が市長に答申した幾つかの地区のうち、山陽新幹線の乗入れを控え変貌しつつある岡山駅と、岡山市の行政管理の府である市庁舎を結ぶ街路の整備が急務であると判断した。

岡山市では、壁面線の指定とセットバックに 2 つの方法があり、壁面線の指定は建築基準法により法的に行うこともできたが、①区画整理ですでに敷地が少なくなっている上、②さらに壁面線の指定によって土地利用効率が悪くなると、地主の同意を得ることが難しいと判断して見送った。

関係者の意識としては、戦災復興によるまちづくりは、市民の協力があってのものなので、地主にお願いして、自主的な判断でセットバックを行ってもらうという方法が採択された。

実際には、市長による文面での依頼に続き、沿道の地主に対する話し合いで、誘導を始めた。セットバックは当時の市長の発想であり、「市民の協力を得て、圧迫感を和らげるような美しいまちづくりをしよう」という哲学的な発想より始まり、セットバック量が 5m であるのも、ゆとりが欲しいと思う市長の考えであった。

岡山市のセットバックは昭和 46 年から始まり、昭和 62 年頃には概ね完成していた。

(4) セットバック第一号、高島屋

セットバック第一号となった高島屋は、初めは市の方針に理解は示したものの、売り場面積を重視するデパートの性格上、協力を得られない状態にあった。しかし、周辺の土地の買い増し交渉が難航し、市に相談があった際、建築指導課は相談に乗るなど全面的に協力した。そして、地主との話し合いが一段落した際に、「十センチでも、二十センチでもいいので協力をしていただけないか」と再度お願いし、その後も担当の谷氏ら市の職員が、何度も言葉を尽くして協力を要請した。高島屋・岡山店は、文化勲章を受章した村野藤吾の設計だったことも関係したかもしれないが、最終的には協力を得ることができた。

(5) 担当者の努力と工夫

岡山の都市景観として、担当者は、スローガンであった「緑と花、光と水」の魅力あるまちづくりに向けて真剣に取り組んでいた。山陽新幹線が岡山まで延伸される頃には、駅正面の桃太郎大通りとともに、市役所筋も大型事務所ビルの林立が予想され、来市者に都会として恥ずかしくないようにしなければ、と望んでいたようである。

担当者としての一番の苦労は、地主（地権者）の方に、市の方針への理解を得ることであった。初めのうちは、協力してもらえそうな地権者をリストアップし、岡崎平夫市長名で、依頼文を、年に 2 回、3 年続けて送ることにした。こうしたことを続けているうちに、町並み整備誘導指針が周知されるようになった。初めは岡山市から事前に話をしに行っていたが、次第に、建築確認受付以前の事前相談の時点で、相談を受けるようになった。土地所有者や、設計者が知らないときには、パンフレットや過去の協力実績の図面を提示し、協力を依頼した。従って、第一号の適用例となった高島屋の存在は大きい。

また、理解・協力を得られない場合には、「街づくりは一日にして出来ず」の姿勢で、粘り強く何度もお願いをしたり、主旨を伝え、5m がダメでも 3m でもいいから容積面積スペースで協力してもらえないか、と代替案交渉したりすることもあった。特に敷地面積の狭い場所は、セットバックする余裕がないため、難しかった。

一方、セットバックの際には、都市美創造に関するアドバイスも行い、外部空間を主眼に置いた指導も行った。主なものとして、セットバック、ポケット広場（市民が戯れる広場）、植栽、広告看板の不設置（屋上看板、袖看板）、色彩コントロール等があげられる。

各担当者によって、目指すテーマもあり、それらが積み重ねられていくことによって、建築物が柔らかく見えたり、圧迫感を感じることの少ない、現在の街並みが誕生した。

残念なことは、①集客力のある商業ビルが少なく、通勤時以外は通行人が少ない点、②途中に公園などの目玉となる施設がないため、人が集まる機会が少ない点、③市役所筋の入口部にあたる駅正面に、パチンコ店や貸金業者などの小型ビルが残り、イメージダウンとなっている点である。

両備錦町ビルと野村證券ビルの 2 つは、担当者としても思い出に残り、また、成功した事例だと思う。この場合、まず、野村證券がセットバックに賛同し、その際、歩道部分もレンガタイルで舗装してあげようか、という案も出された。しかし、市の土木課が、舗装後の維持管理ができないと断り、結局セットバックだけとなった。両備ビルは、当初、見た目があまり良くなかったため、野村證券との境界壁はどうしても取り外せないということであった。しかし、建替えの際に境界壁は撤去され、舗装部分は野村證券の舗装と同じものを使用し、一体化を生み出した。

昭和 47 年より、全国でも初の優秀建築物の表彰制度が発足した。昭和 57 年には、表彰 10 回目の節目として、パンフレットを作成するなど、文書化して残すようになった。

4．横浜市のセットバックとの違い

(1) 山下公園通りのセットバック

横浜市の山下公園通りのセットバックについては、当初からの担当者である、国吉直行（くによしなおゆき）氏にヒアリングを実施した。担当時期は昭和 46 年から現在に至るまでで、ヒアリング日は、平成 20 年 1 月 17 日である。

戦後、横浜市の山下公園通りは、5 割程度の建物が残っていた。周辺が、横浜市の一等地であったことから、山下公園通り拡幅の都市計画が決定したが、他の対応策をとるだけの土地がなかったため、セットバックを実施することになった。セットバック量が 3m となった理由は、①幅 5m の歩道に対して 2.5m 地点に樹齢 50 年のイチョウが植えられていて、イチョウの根を切らないよう配慮する必要があった、②セットバック対象の第一号となった県民ホールとの交渉の結果である。一部の歴史的建造物を除き、現在の通りはファサードが一直線に揃っている。

セットバックは、岡山市と同様、昭和 46 年から始まり、先述の県民ホールに続き、産業貿易センタービル、日航ホテルと順次行われていった。県民ホールが建設された場所は横浜市の土地であり、神奈川県に売却する際の条件として、セットバックへの協力が入っていた。また、同時期に隣に建設予定だった産業貿易センターも、セットバックのお願いをしながら、容積率や高さ制限の問題から、横浜市市街地環境設計制度を適用し、公開空地を設けるよう誘導した[9]。

また、貿易センターと同じく日航ホテル（現：ホテルモントレ）の建設計画もあり、三者の施主・設計者に市が加わり四者協議が行われ、街づくり指針とビルとの関係について意見交換を行ったり、歩行者空間のデザインを共通のものとすることなどが確認された[10]。

その後のセットバックにあたっては、これらの事例や、横浜市市街地環境制度によって、容積率や高さ制限の緩和などプラスボーナスを設けてセットバックの誘導を行うようになった。山下公園通りのセットバックは、郵便貯金会館が完成した昭和 55 年に一応の完成をみた。

横浜市のセットバックは、テーマとして「横浜の顔として歩いて楽しい街をつくる」ことであり、デザインとしてはヨーロッパを一部ヒントにしながらも、その大半はアメリカのニューヨークを参考としたものである。

(2) 岡山市と横浜市とのセットバックの比較と分析

岡山市では、セットバック以外にも方法があったが、都市美観上、敢えてセットバックを選択し、誘導を行ってきた。誘導にあたっては、横浜のように容積率や高さ制限の緩和などのプラスボーナスは考えず、ひたすら地権者や建築主の理解が得られるまで足を運ぶという方策がとられた。その背景には、既に書いたが、市長の「街づくりは一日にして出来ず」という、一種、気の長い発想があった。セットバックに強制力がないため、理解が得られない場合は、5m以下のセットバックとなったり、理解が得られ過ぎた場合は、5m以上のセットバックが実現した。結果として、市役所筋のファサードラインは、横浜の山下公園通りのような一直線にはなっていない。また、セットバック部分の利用法も、横浜では、歩道部分と区別がつかないようになっているが、市役所筋では各ビルがそれなりに工夫して、空間の利用を図っている。これだと、個人のスペースを市に提供しているという感じがよく出ているし、各スペースの使い方にバラエティのあるところに人間くささが感じられる。やはり、当初、発案者である市長が、戦禍に遭って復興中のヨーロッパの都市を視察し、それに、感動したことが大きく響いている。

一方、横浜市の場合、同じ都心部でも、戦前からの都

心部であり、樹齢50年というイチョウ並木の存在も大きかった。セットバックを実現する方法論は、岡山市とは違い、経済的利益を打ち出した上で誘導しているため、より実現性が高く、山下公園通りのファサードラインは、見事に一直線である。その上、セットバックで供出された部分も、歩道と同じ舗装をしているため、街路としての一体感はより高い。戦禍に遭わなかったアメリカのニューヨークを参考にしたという話もうなずける。

結果として、昭和46年という、わが国では最も早い時期にスタートした2つの都市のメインストリートのセットバックは、規模もほぼ似ているが、セットバックを実現させる手法、セットバック部分の使い方、セットバック終了後の街路景観など、すべての点で全く異なるものとなった。どちらが優れているなどと比較する筋合いのものではないが、セットバックの黎明期に、これだけ両極端の事例が存在していたことは、貴重な体験として記録しておく価値は十分にあると思われる。

5．結論

以下のような、結論を得た。

1) 昭和46年に始まった岡山の市役所筋のセットバックは、同年に始まった横浜の山下公園通りのセットバックと並ぶ、わが国のセットバック黎明期の代表的な事例である。岡山の場合、市役所筋のセットバックに関わった市の建築指導課の歴代の担当者にヒアリングすることで、岡山方式の全体像をつかむことができた。
2) 岡山と横浜は、延長約1kmの、黎明期の代表事例という点では似ているが、両者の類似点はそこまでで、セットバックを実際に実現していくプロセスは、全く異なるものであった。すなわち、岡山の場合は、担当者が地権者の理解を得るために時間をかけて地道に説得するという手法を採用したが、横浜の場合は、容積率や高さ制限の緩和などのプラスボーナスを導入することで、円滑化を図った。ただし、どちらも、事例が積み重なることで、地権者に「セットバックが要求される街路」との認識が周知していき、作業が楽になる傾向が見られた。
3) また、理想とした街路景観も違っていたため、岡山では、建物ごとの個別のセットバックにそれぞれの個性の見られるものとなったが、横浜では、建物のファサードラインが直線的に入るものとなった。両者の違いは、参考にした街並みが、ヨーロッパかアメリカかの違いによるところが大きい。

謝辞

多忙な中、長時間にわたるヒアリングに協力いただいた岡山市の谷 義仁氏、岡村勝信氏、上田恭嗣氏、川端護宰氏、高上禮行氏、横浜市の国吉直行氏に心からの謝意を表したい。

写真-9 岡山、市役所筋（撮影：著者、2007.12）

写真-10 フランス、パリ
（出典：http://freepages.family.rootsweb.com/~deadrelatives/bridgephotos.html）

写真-11 横浜、山下公園通り（撮影：著者、2008.1）

写真-12 アメリカ、ニューヨーク
（出典：http://www.flickr.com/photos/duelin_markers/2835899/）

参考文献

1) 岡山市街地のロータリー式交差点に由来する円形状空間の独自性とその活用に関する研究，北村尚子・樋口輝久・馬場俊介，土木史研究（講演集），Vol. 25，2005，pp. 123-130
2) 『都市景観のデザイン』，花輪 恒，鹿島出版，1989，p. 111
3) 『岡山市の都市美造成のための景観構想計画』，社団法人岡山県建築士会，35-45、50
4) 戦前の岡山市における都市計画街路事業と土地区画整理事業，板谷誠吾・樋口輝久・馬場俊介，土木史研究（講演集），Vol. 23，2003，pp. 209-219
5) 『愚直人生らくがき帖』，岡崎平夫，1991
6) 前掲 5)，pp. 260-266
7) 岡山市都市整備局建築指導課資料
8) 岡山市都市整備局公園緑地課資料
9) 『都市ヨコハマをつくる実践的まちづくり手法中公新書』，田村明，中央公論社，1983，pp. 142-148
10) 前掲 9)，p. 111